

〈公募論文〉

日本語教育における性差の学習 ——オーストラリアの学習者の意識調査より——

トムソン木下千尋*・飯田純子**

キーワード: 日本語の性差, 意識調査, 文化背景, 学習意欲, オーストラリア

要 旨

日本語の性差の研究の中で、日本語教育と関連し、しかも、データに基づいたものは数少ない。日本語教育の中での性差の理想的な指導方法を探究する研究の一環として、本稿では、先行の指導者の意識調査 (Iida and Thomson 1999) にも言及しながら、オーストラリアの学習者の意識調査アンケート(オーストラリアの6大学対象, 回答者704名)の結果を中心に、報告、考察していく。

学習者の調査の結果、回答者全体としては、性差の認識、受け取り方にばらつきはあるが、性差の学習には意欲的であることがわかった。人称代名詞や呼称に表れる性差の認識度は高かったが、接頭辞や、漢字語彙の使用頻度などの項目は、あまり認識されていなかった。回答者の学習レベルが上がり、日本語話者との接触頻度が高くなり、日本滞在期間が長くなると、性差の認識度が上がる。この傾向に反するのが、漢字語彙の項目で、学習レベルなどに関係なく、一般的に認識度が低く、漢字圏出身の学習者が、他のグループに比べて認識度が高いという結果が出た。

日本語に表出する性差の捉え方、そして、性差を認識し、性差表現を使えるようになりたいかという学習意欲についての質問には、両項目で、全体的には回答者が積極的な姿勢を見せている。その中で、特に、性差を性差別と捉えるのは中国系、韓国系(特に女性)に多く、性差の学習に一番意欲的なのはオーストラリア系であるという結果が出た。母文化内で性差別の対象となりうる回答者が性差別に敏感であり、他グループと比べて、日本滞在期間の長いオーストラリア系が学習に熱心であるという考察ができる。

指導者調査に現れた教師側の性差指導に対する懸念と、学習者調査の結果には開きがあったので、教師の感覚に頼らず、実際のデータに基づく考察の必要性を再認識した。

1. はじめに

本研究は、日本語の特徴の一つである男女差を日本語教育の枠組みのなかで検討するものであ

* Chihiro Kinoshita Thomson: ニューサウスウェールズ大学ジャパン・コリア・スタディーズ学科長。
** IIDA Sumiko: ニューサウスウェールズ大学ジャパン・コリア・スタディーズ学科専任講師。

る。本稿は、その中間報告で、意識調査をもとに、オーストラリアの大学の日本語学習者、及び指導者が日本語の性差をどのように捉えているかを一考する。

まず、言語と性差の研究に触れ、日本語教育と性差に関する先行研究に当たり、本研究の目的を明らかにした上で、学習者を対象とした調査の内容、結果を報告し、学習者、指導者の日本語の性差に関する意識を考察していく。

2. 日本語教育と性差についての先行研究

日本語は、タイ語などと共に、世界の言語の中でも性差が最も顕著に表れる言語の一つと言われている(阿部 1998)。日本語の性差の研究は、上代日本語における女房言葉(森野 1975)など、古くから行われているが、現代日本語においては、日本語研究の中ではまだまだ少数派で、性差と日本語教育を結び付けた先行研究はさらに数少ない。

欧米では、言語と性差に関する研究は、性差がそれほど顕著に表れない英語などを中心に、1960年代後半から1970年代前半のフェミニズム運動をきっかけとして盛んになった(Lakoff 1973, Zimmerman and West 1975, Hirschman 1994)。その後、現在に至るまで膨大な数の研究が行われてきた。これらの多くは、主に語彙使用や会話の進め方に表れる男女差を、社会における男女の位置付けと対照させているものである¹。

一方日本語の方は、もとよりその男女差が文法レベルで顕著に表れるからか、欧米に見られたような、爆発的なフェミニズムの影響を受けることもなく、独自に研究が行われてきた(井出 1992, 1997)。これらの研究は、終助詞、人称代名詞および呼称、美化語や敬語使用など語彙、文レベルで分析した男女差研究(Ide 1986, McGloin 1991, マグローイン 1997, 金丸 1997, 宇佐美 1997 など)が中心で、欧米で盛んな音声レベルに視点を置いた研究(大原 1997)や、語用面から見た談話レベルの研究(内田 1997, 江原 他 1984, 川成 1993, 重光 1993, 松田 他 1995 など)は、まだそれほど多くは行われていない。また、これらの研究のほとんどは、日本人同士の日本語母語場面でのデータに基づくもので、接触場面でのデータをもとにしたものは、少数(大原 1997, 松田 他 1995)を除いて、ほとんど見られない。

日本語の性差を日本語教育との関連で考察している研究も、遠藤(1990a)、川崎(1997)、Otsuji and Thomson (2001)、谷部(1992)、浅田(1998)など、数えるほどである。遠藤(1990a)は、テレビのインタビュー番組の会話を分析し、伝統的に言われている女性特有の話し方は実際には使われていないという結果を得、その結果から日本語教育で日本語の性差を強調することへ

¹ こういった研究は、Coates (1986), Coates and Cameron (1988), Tannen (1990, 1993, 1994), Holmes (1995, 1998) に詳しい。

の懸念を提示している。川崎 (1997), Otsuji and Thomson (2001) は、それぞれ、総合的な日本語の教科書、ビジネス日本語の教科書の中の男女差を検討し、教科書の必要以上の男女のステレオタイプ化を指摘している。谷部 (1992) は、日本語教師の人口を性別に見て、教師の性とそれによって学習者が受け得る影響について考察した。さらに、浅田 (1998) は、日本語学習者の男女差を示す文末表現の産出、受容能力を見た。これらの研究の論点は確かなデータをもとにしていないものが多く、データをもとにしている場合も、実際の日本語教育で想定される接触場面でのデータに基づいたものは、上記の浅田以外にはほとんど見られない。さらには、日本語教育において性差をどのように扱うかに関連するものとしては、宇佐美 (1997), Mishina (1994), 遠藤 (1990b) に意見が述べられているが、これらもデータに証拠づけられたものではない。

こういった状況を見ると、日本語教育における性差指導は、これまでのところ、学習者の実態をあまり見ずに、また、実際のデータに当たらずに、指導者側の判断のみで行われているように思われる。当事者である日本語学習者は、日本語に見られる男女差をどのように受けとめているのであろうか。そこで指導者、学習者の両方から見た総合的なデータをもとにした研究の必要性が生じてくる。

3. 本研究の目的

本研究の目的を次のように設定した。

「オーストラリアで日本語を学ぶ学生が、オーストラリア人としての、あるいは、オーストラリア文化に根ざした個々のアイデンティティを保ちながら、日本語で有効にコミュニケーションがはかれるようになるために、性差をどのように指導するのが一番効果的かを探る。」この目的に到達するために、以下のように3つの課題を設定した。

課題1 指導者の視点から見る

- a. 日本語教師は、日本語の性差をどのように定義しているか。
- b. 日本語教師は、日本語の性差の存在をどのように感じているか。
- c. 日本語教師は、日本語の性差を指導しているか、あるいは指導していないか。しているとすれば、どのように指導しているか。

課題2 学習者の視点から見る

- d. 日本語学習者は、日本語の性差の知識があるか。あるとすれば、どのようなタイプの性差の表出を認識しているか。
- e. 日本語学習者は、日本語の性差の存在をどのように感じているか。
- f. 学習者は日本語の性差について学び、それを実際のコミュニケーションの場で使用したいと考えているか。

課題3 接触場面での検証

- g. 接触場面で行われるコミュニケーションでは日本語の性差はどのように表出するか。
- h. 日本人母語話者は、接触場面で行われる日本語のコミュニケーションで、非母語話者の性差を表出するような言語使用、あるいは不使用についてどのように感じているか。

現在のところ課題2まで進んでおり、課題3は今後の研究となる。本稿では、課題1の結果に言及しながら、課題2の研究を中心に報告、考察していきたい。

4. 指導者の視点から見た日本語の性差と日本語教育

課題1の指導者の視点から見た日本語の性差と教育(Iida and Thomson 1999)では、全豪の大学で日本語を指導する教師202名に、郵送による記述式アンケートを行った結果、63名からの回答を得て(回答率31%)、それを分析した。

これによると、日本語に表れる性差の理解は教師によって様々だが、人称代名詞などに代表される語彙レベル、または、終助詞などの文法レベルでの差異として理解している場合が多い。指導に関しては、授業の中で、日本語の性差に関する問題がそれほど多くは起こらないにしても、教師の約3分の2がなんらかの問題を経験している。オーストラリア人女性が女性言葉を使うことへの反発を挙げた回答例もあった。性差指導の必要性については、教師の70%がある程度は必要であると回答している。しかし、実際行われている指導の内容は多様で、その根底には、日常のコミュニケーションが円滑に行えるようになるためには必要であるという考えがある一方で、言葉の性差が性差別と結びつくのではないかという懸念、あるいは、日本語の性差は中性化しつつあるので、指導の必要はないという不要論などが、観察された。

日本語における性差の指導は、オーストラリアの大学における日本語教育のなかでは、積極的に行われているとはいえ、無視できないことではあるが、時間的制限と適切な教材の不足、カリキュラムのなかでの優先順位などの制約から、主要指導項目からは、はずされているということが言える。

5. 学習者の視点から見た日本語の性差と日本語教育

5-1. 調査方法

上記の指導者用アンケート調査の結果と学習者のパイロット調査(Iida and Thomson 1999)を参照し、学習者の性差の認識、その捉え方、学習意欲を尋ねる記述式アンケート調査票を作成し、1999年から2000年にかけて、全豪各州の主要大学に調査協力を依頼した。ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、クイーンズランド州、南オーストラリア州、西オーストラリア州

の6大学から協力を得、704の調査票を回収した。これは、1998年度全豪の高等教育機関における日本語学習者数、9,593人(国際交流基金2000)の約7%を占める。回収された調査票は統計ソフトSPSSを使用して分析を行った。

5-1-1. 調査票

アンケート調査票(参考資料)は、以下のような質問から構成された。

- a. 回答者の背景: 回答者の性別, 年齢, 日本語学習年数, 日本滞在日数, 母文化, 母語, 日本語話者との接触頻度。
- b. 日本語の性差の認識: 終助詞, 人称代名詞, 呼称, 語彙の種類, 接頭辞や漢字熟語の使用頻度, 待遇表現, 音声レベルの違い, 談話形式, 非言語コミュニケーション形式に性差が表れることを回答者が認識しているか。
- c. 日本語の性差の捉え方: 回答者が日本語の性差を, 言語の自然な要素として, 日本語の伝統として, あるいは, 性差別として捉えているか。
- d. 性差表現の学習意欲: 回答者が日本語の性差表現を認識, あるいは, 学習したいと思っているか。

5-2. 調査結果と分析

5-2-1. 学生回答者のプロフィール

表1~8に示される回答者の背景の特徴は、以下のように要約される。

- ① 回答者の4分の3(74.9%)は、ニューサウスウェールズ州の2大学の学生である。(表1)
- ② 大半(70.6%)は女子学生である。(表2)
- ③ 過半数(58.5%)は17~20歳の年齢層に属し、中央値は20歳である。(表3)
- ④ 回答者の母文化は、中国系(38.6%)、オーストラリア系(31.2%)が多い。(表4)
- ⑤ 4分の1(24.6%)の回答者は、2~4年の日本語学習歴を持ち、平均値は2.64年である。(表5)
- ⑥ 大半は中級(35.8%)、または上級(40.9%)レベルの日本語学習者である。(表6)
- ⑦ 回答者の半数は、日常日本語話者との接触が全くない(17.2%)か、ほとんどない(33.2%)。(表7)
- ⑧ 日本滞在経験はゼロから12年と幅があるが、半数(49.6%)は、日本滞在経験がない。(表8)

典型的な回答者像は、ニューサウスウェールズ州の大学で中、上級レベルの日本語を学習中、訪日経験はなく、日常日本語話者との接触はほとんどない20歳の中国系女子学生となる。

中国系が多いのは、回答者の大半を占めたニューサウスウェールズ州の2大学で、中国系の学

表 1 大学別回答者数

大学(所在州名)	回答者数 (%)
ニューサウスウェールズ 1	330 (46.9%)
ニューサウスウェールズ 2	197 (28.0%)
クイーンズランド	34 (4.8%)
南オーストラリア	37 (5.3%)
ビクトリア	61 (8.7%)
西オーストラリア	45 (6.4%)
計	704 (100.0%)

表 2 性別回答者数

性別	回答者数 (%)
男性	199 (28.3%)
女性	497 (70.6%)
不明	8 (1.1%)
計	704 (100.0%)

表 3 年齢別回答者数

年齢層	回答者数 (%)
17~20 歳	412 (58.5%)
21~25 歳	243 (34.5%)
26~30 歳	30 (4.3%)
31~35 歳	5 (0.7%)
36~40 歳	1 (0.1%)
41~54 歳	1 (0.1%)
不明	12 (1.7%)
計	704 (100.0%)

平均値 20.7 歳; 中央値 20 歳;
最小値 17 歳(11 件); 最大値 54 歳(1 件).

表 4 文化背景別回答者

文化背景*	男性 (文化背景内%)	女性 (文化背景内%)	総数** (全文化背景内%)
オーストラリア系	62 (28.6%)	155 (71.4%)	218 (31.2%)
中国系	72 (27.1%)	194 (72.9%)	270 (38.6%)
インドネシア系	8 (21.1%)	30 (78.9%)	38 (5.4%)
韓国系	29 (30.5%)	66 (69.5%)	95 (13.5%)
マレーシア系	3 (17.6%)	14 (82.4%)	17 (2.4%)
その他***	25 (41.0%)	36 (59.0%)	61 (8.7%)
計	199 (28.7%)	495 (71.3%)	704 (100.0%)

* 自己申告による; ** 不明を含む; *** インド, ベトナム, タイなどのアジア系 (42%), アメリカ, スウェーデン, ハンガリーなどの非アジア系 (39%), 「ドイツと日本」などの多文化背景 (20%).

生が他大学より多く学んでいることに起因する(中国系回答者の 88.2%がこの 2 大学に集中). シドニーがアジア系移民の玄関口となっていることから, シドニーを州都とするニューサウスウェールズ州の 2 大学にはおのずとアジア系学習者が多くなる. 他のアジア系もこの 2 大学に集中していた. また, 実際には, 学習者の分布は初級が多く, 上級が少ないピラミッド型であることが推測されるが, 回答者に中上級が多い理由には, 日本語の性差の調査ということから, 調査票が初級ではなく中上級クラスに配られた傾向が挙げられる. 特筆すべきは, 中上級学習者が多いグループであるにもかかわらず, 訪日経験のない学習者が半数を占めることだろう. 実際の分

表 5 回答者の日本語学習歴

学習年数	回答者数 (%)
2年未満	192 (27.3%)
2年以上 4年未満	173 (24.6%)
4年以上 6年未満	117 (16.6%)
6年以上 8年未満	131 (18.6%)
8年以上 10年未満	67 (9.5%)
10年以上 12年未満	10 (1.4%)
12年以上	3 (0.4%)
不明	11 (1.6%)
計	704 (100.0%)

平均値 2.64 年; 最小値 0.5 年(96 件); 最大値 14 年 (1 件).

表 7 回答者の日本語話者との接触頻度

頻度	回答者数 (%)
全く無し	121 (17.2%)
稀に	234 (33.2%)
時々	194 (27.6%)
毎週	102 (14.5%)
毎日	42 (6.0%)
不明	11 (1.6%)
計	704 (100.0%)

表 6 回答者の学習レベル

レベル	回答者数 (%)
初級	112 (15.9%)
中級	252 (35.8%)
上級	288 (40.9%)
超級	52 (7.4%)
計	704 (100.0%)

表 8 回答者の日本滞在歴

日本滞在日数	回答者数 (%)
なし	349 (49.6%)
1 週間	36 (5.1%)
2 週間	58 (8.2%)
3 週間	35 (5.0%)
1 か月	53 (7.5%)
2 か月	43 (6.1%)
3 か月	13 (1.8%)
1 年	68 (9.7%)
2 年	27 (3.8%)
3 年	6 (0.9%)
5 年	3 (0.4%)
5 年以上	4 (0.6%)
不明	9 (1.3%)
計	704 (100.0%)

平均値 90 日; 中央値 0 日; 最小値 0 日 (349 件); 最大値 12 年 (1 件).

布を反映する初級学習者の多い回答者グループであれば、訪日経験のない学習者はさらに多くなっただろうと推測される。また、表9にあるように訪日経験には文化背景別に大きく差があり、オーストラリア系、特にオーストラリア系男性が抜きんでて日本滞在期間が長いことがわかる²。これは、オーストラリアの高校は交換留学制度が充実していること、オーストラリアと日本の間にワーキングホリデーの協定があることなどが理由として挙げられよう。さらに、大半が中上級学習者であるにもかかわらず、日常日本語話者との接触がほとんどないケースが多い。昨今のオーストラリアにおける地元日本人コミュニティーを活用した日本語教育活動(トムソン 1997, トムソン・舛見蘇 1999)の実施が一定のプログラムに限られていることを示している。

² オーストラリア系と他グループの平均値の差はそれぞれ $P < .001$ レベルで有意。但し、その他のグループとの差は $P < .01$ レベル。オーストラリア系男女間の差も $P < .05$ レベルで有意。Mann-Whitney の U 検定による。

表 9 文化背景別日本滞在平均日数

文化背景	日本滞在平均日数		
	女性	男性	全体
オーストラリア系	123	363	191
中国系	40	24	35
インドネシア系	13	54	22
韓国系	17	43	25
マレーシア系	5	0	4
その他	61	92	74
全体	71	142	90

表 10 回答者の性差の認識

項目	知っていた*	知らない*
終助詞	44.3%	55.4%
人称代名詞	91.1%	8.7%
呼称	87.2%	12.5%
語彙	45.2%	54.5%
接頭辞	33.7%	66.1%
漢字語彙の使用	38.4%	61.4%
待遇表現の使用	68.6%	31.1%
音声	61.1%	38.6%
談話形式	40.6%	59.1%
非言語コミュニケーション形式	54.3%	45.5%

* 0.3% の不明を除く。

5-2-2. 学生回答者の日本語の性差の認識

学生回答者の日本語の性差の認識の実態は、表 10 にまとめた。回答者の大多数が人称代名詞「はく、わたし」など (91.1%)、呼称「～さん、～くん」など (87.2%) に性差が表れることを知っていたと答えた。過半数が待遇表現 (68.6%)、声の高低等に表れる音声レベルの差異 (61.1%)、非言語コミュニケーション形式 (54.3%) に性差が表れることを知っていたと答えている。しかし、他の項目に関しては、半数以上が性差の指標として認識していなかった。

性差の学習と関連して、回答者の学習レベル、日本語話者との接触頻度、文化背景によって、各項目の認識に違いがあるかを分析してみた。表 11 に見られるように、学習レベル、日本語話者との接触頻度に関しては、漢字語彙の使用頻度という項目を除いて、有意の程度に違いはあるが、全ての項目に有意な差が見られた。つまり、学習レベルが上がるにつれて、また、日本語話者との接触頻度が高くなるにつれて、認識率が高くなっていることを表している。漢字語彙に関しては初中上級にかかわらず、また、接触頻度にかかわらず、認識度が低いといえる。表 12 では、日

表 11 学習レベル, 日本語話者との接触頻度, 文化背景による認識の差

項目	学習レベル	接触頻度	文化背景
終助詞	$\chi^2(3) = 96.86^{***}$	$\chi^2(4) = 50.73^{***}$	$\chi^2(5) = 18.47^{**}$
人称代名詞	$\chi^2(3) = 90.65^{***}$	$\chi^2(4) = 15.23^{**}$	$\chi^2(5) = 18.09^{**}$
呼称	$\chi^2(3) = 91.07^{***}$	$\chi^2(4) = 14.14^{**}$	$\chi^2(5) = 26.13^{***}$
語彙	$\chi^2(3) = 29.31^{***}$	$\chi^2(4) = 14.75^{**}$	$\chi^2(5) = 15.01^*$
接頭辞	$\chi^2(3) = 43.09^{***}$	$\chi^2(4) = 15.03^{**}$	$\chi^2(5) = 7.28$
漢字語彙の使用	$\chi^2(3) = 3.43$	$\chi^2(4) = .39$	$\chi^2(5) = 55.83^{***}$
待遇表現の使用	$\chi^2(3) = 25.90^{***}$	$\chi^2(4) = 21.64^{***}$	$\chi^2(5) = 8.72$
音声	$\chi^2(3) = 20.18^{***}$	$\chi^2(4) = 28.61^{***}$	$\chi^2(5) = 17.98^{**}$
談話形式	$\chi^2(3) = 13.83^{**}$	$\chi^2(4) = 28.24^{***}$	$\chi^2(5) = 5.20$
非言語コミュニケーション形式	$\chi^2(3) = 42.74^{***}$	$\chi^2(4) = 47.16^{***}$	$\chi^2(5) = 24.71^{***}$

カイ 2 乗検定による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

表 12 日本滞在日数と性差の認識の相関

項目	
終助詞	$r(694) = .1585^{***}$
人称代名詞	$r(694) = .0784^*$
呼称	$r(694) = .0784^*$
語彙	$r(694) = .1053^{**}$
接頭辞	$r(694) = .1483^{***}$
漢字語彙の使用	$r(694) = .0206$
待遇表現の使用	$r(694) = .1001^{**}$
音声	$r(694) = .1270^{**}$
談話形式	$r(694) = .1101^{**}$
非言語コミュニケーション形式	$r(694) = .1620^{***}$

ピアソン相関係数による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

本滞在期間と各項目の認識の相関を見ているが、ここでも、漢字語彙に関してのみ相関が見られない。つまり、日本に長く滞在すると、他項目に関しては認識度が上がるが、漢字語彙の使用に関する性差の表れは、滞在期間にかかわらず、認識の度合いが低いことになる。

回答者の母文化による各項目の認識の差をさらに検討してみると(表 11)、有意な差がいくつか見られるが、その中でも、呼称、漢字語彙、非言語コミュニケーション形式に差が顕著に表れている。漢字語彙に関しては、中国系、韓国系の漢字圏と見られるグループは、漢字熟語の使用頻度の項目の認識が 50% と比較的高かったが、非漢字圏と見られるオーストラリア系、インドネシア系、マレーシア系は、それぞれ 22%、26%、35% と低かった。漢字語彙の項目の認識に関しては、学習レベル、日本語との接触の度合いなどよりも、回答者が漢字圏出身かどうかが重要な要素となっていることがわかる。呼称、非言語コミュニケーションに関しては、オーストラリア系

(それぞれ 96%, 65%)が他グループ (82%, 50%) より多く認識し, 非アジア系回答者の認識が高い傾向が見られた。

5-2-3. 学生回答者の日本語の性差の捉え方

日本語の性差の捉え方は, 下記の 5 項目について大賛成, 賛成, 中立, 反対, 大反対のどれかを選ぶ Likert 形式で調査された。

- (1) 日本語の性差は日本の美しい伝統であって, 男女の特色を際立たせるもので, 保持していくべきものである。
- (2) 日本語の性差は日本の伝統文化の一部であり, 尊重され, 受け入れられるべきものである。
- (3) 日本語の性差は転換期にあり, 今後なくなるだろう。
- (4) 性差はほとんどの言語に存在するもので, 差別を示唆するものではなく, 単に性別間の相違を表すに過ぎない(普遍)。
- (5) 日本語の性差は性差別を象徴, 奨励するもので, 避けるべきである。

回答は, 図 1 にまとめた。全体的に見ると, 回答者は性差を他の言語にも存在する普遍的なものとして捉え, 日本語の性差は将来なくなるかもしれないし, なくなるかもしれないと考えている。また, 性差を性差別と捉える回答者のほうがそう捉えない者より多かったのにもかかわらず, 半数の回答者は日本語の性差は尊重され, 受け入れられるべきと捉えている。

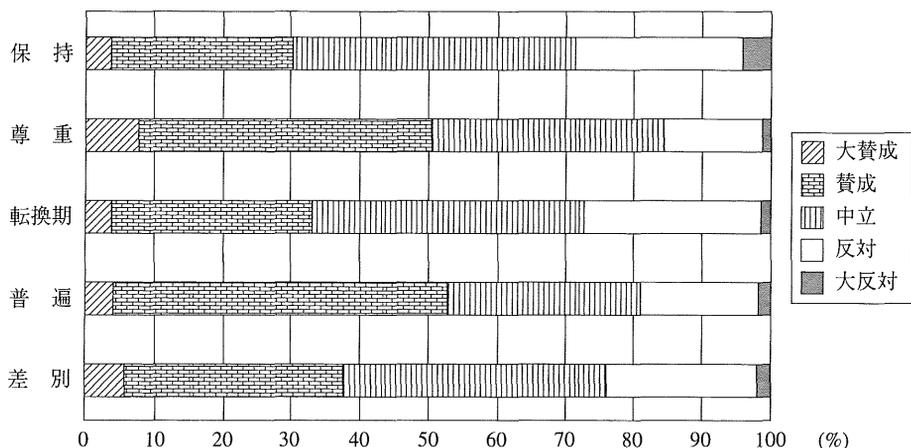


図 1 学習者の日本語の性差の捉え方

5-2-4. 性差の捉え方と母文化、性別の影響

回答者の母文化、性別が、性差の捉え方と関わりがあるか分析した。表 13, 14 のように、「保持」の項目は、母文化グループ間、男女間で、回答に有意な差が見られた。韓国系回答者グループが他のグループより、又、女性が男性より、否定的に、つまり、日本語の性差は保持していくことに反対と回答している。「尊重」の項目では、男女間の回答に有意な差が見られた。ここでも、女性が男性より否定的に、つまり、尊重することに反対と回答している。「転換期」の項目では、男性の方が日本語が転換期にあることを肯定している。「普遍」の項目では、男性の方が女性より肯定的に、つまり、性差を普遍的なものと回答した。「性差別」の項目では、母文化グループ間、男女間、それぞれで回答に有意な差が見られた。中国系、韓国系の回答者が、他のグループより際立って日本語の性差を性差別と捉えていた。また、女性が男性より多く性差別と捉えている。

母文化の中の性別間の回答をさらに分析すると(表 15)、中国系の回答者グループの中で「保持」「尊重」「普遍」「性差別」の4項目で男女間に有意な差が見られた。中国系男性回答者は女性回答者より性差の受け入れ度が高かった。韓国系回答者グループも「保持」「尊重」「性差別」の項目で男性が女性より有意な差で日本語の性差に肯定的であった。

表 13 文化背景による性差の捉え方の差

	保持	尊重	転換期	普遍	性差別
文化背景	$F(6) = 3.22^{***}$	$F(6) = 1.132$	$F(6) = 3.22^{**}$	$F(6) = .337$	$F(6) = 6.409^{***}$

F 検定による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

表 14 性別による性差の捉え方の差

	保持	尊重	転換期	普遍	性差別
性別	$t(671) = 6.12^{***}$	$t(671) = 4.46^{***}$	$t(667) = 2.04^*$	$t(671) = 2.94^{***}$	$t(673) = -4.07^{***}$

t 検定による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

表 15 母文化グループ内の性別による性差の捉え方の差

	保持	尊重	転換期	普遍	性差別
オーストラリア系	$t(211) = 1.83$	$t(93) = .58$	$t(210) = 1.10$	$t(212) = 1.02$	$t(211) = -1.44$
中国系	$t(255) = 5.42^{***}$	$t(255) = 3.37^{**}$	$t(252) = 1.80$	$t(149) = 2.43^*$	$t(256) = -2.80^*$
インドネシア系	$t(36) = 1.28$	$t(36) = 1.73$	$t(36) = 2.49^*$	$t(36) = -.81$	$t(36) = -.41$
韓国系	$t(87) = 4.19^{***}$	$t(88) = 2.54^*$	$t(87) = -1.61$	$t(87) = 1.86$	$t(89) = -2.55^*$
マレーシア系	$t(14) = -.98$	$t(14) = -.24$	$t(14) = 1.49$	$t(12) = 3.32^{**}$	$t(14) = -.44$
その他	$t(56) = 1.61$	$t(53) = 2.55^*$	$t(56) = .67$	$t(55) = 1.24$	$t(55) = -1.26$

t 検定による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

5-2-5. 学生回答者の性差表現の学習意欲

学生回答者の性差表現の学習意欲も、同様に5段階のLikert形式で下記の項目について調査された。

- (1) 日本語の性差が認識できるようになることは重要である。
- (2) 日本語の性差表現が使用できるようになることは重要である。

回答は、図2にまとめた。図1からは、性差を性差別と捉える回答者の方が性差別と捉えない回答者より多かったにもかかわらず、図2の学習意欲の質問項目では、大多数の回答者が性差の認識を学習することの重要性に賛成し、さらに、性差表現を使用できるようになりたいと回答して、学習意欲の高さが窺える。

5-2-6. 性差の学習意欲と母文化、性別の影響

回答者全体の傾向では、性差を認識し、性差表現を使用することへの学習意欲が高かったが、学習意欲は、回答者の文化背景、性別によって差が現れた(表16, 17)。オーストラリア系の回答者グループが学習に一番積極的であり、韓国系、インドネシア系が消極的であった。また、女性より、男性が高い学習意欲を示した。さらに、母文化グループ内の性別による意欲の差を見ると、韓国系のグループの認識、使用、両項目に対する意欲に有意な差が見られた(表18)。両項目とも男性の方に高い学習意欲が見られた。

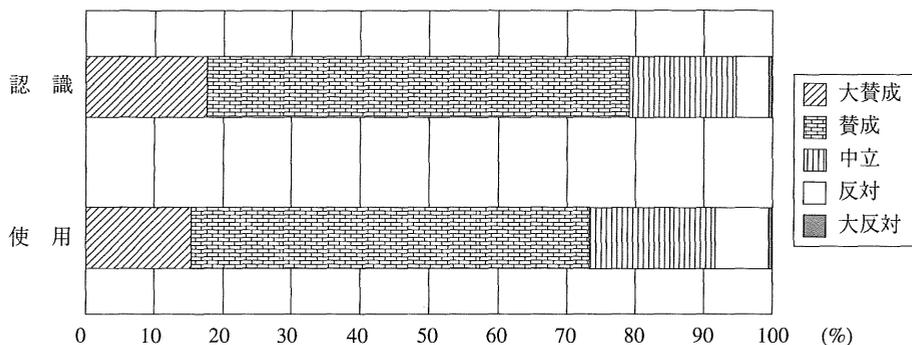


図2 学習者の性差の学習の意欲

表16 文化背景による学習意欲の差

	認識	使用
文化背景	$F(6) = 5.849^{***}$	$F(6) = 3.185^{**}$

F検定による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

表17 性別による学習意欲の差

	認識	使用
性別	$t(671) = 3.82^{***}$	$t(397) = 3.05^{**}$

t検定による; 有意度 * $P < .05$; ** $P < .01$; *** $P < .001$.

表 18 母文化グループ内の性別による学習意欲の差

	認識	使用
オーストラリア系	t(99) = 1.94	t(210) = .69
中国系	t(255) = 1.16	t(151) = 1.00
インドネシア系	t(36) = -.25	t(36) = -.51
韓国系	t(54) = 3.22**	t(88) = 2.08*
マレーシア系	t(14) = -.79	t(14) = .77
その他	t(56) = 2.05*	t(55) = 2.78**

t 検定による; 有意度 *P < .05; **P < .01; ***P < .001.

表 19 学習レベルと学習意欲の相関

	認識	使用
スピアマンの順位相関係数	$r_s(680) = .1475^{***}$	$r_s(679) = .1044^{**}$
ケンドールの順位相関係数	$\tau(680) = .1301^{***}$	$\tau(679) = .0922^{**}$

有意度 *P < .05; **P < .01; ***P < .001.

表 20 日本滞在期間と学習意欲の相関

	認識	使用
スピアマンの順位相関係数	$r_s(671) = .2129^{***}$	$r_s(670) = .1775^{***}$
ケンドールの順位相関係数	$\tau(671) = .1811^{***}$	$\tau(670) = .1498^{***}$

有意度 *P < .05; **P < .01; ***P < .001.

5-2-7. 学習レベル, 日本滞在期間と学習意欲の相関

続いて, 学習レベル, また, 日本滞在期間と学習意欲に相関関係があるかどうか調べた. 表 19 に見られるように, 学習レベルと学習意欲の間に有意な相関関係が見られる. 学習レベルが上がるにつれて, 性差が認識できるようになりたい, 性差表現が使えるようになりたいという気持ちが強くなるようだ. さらに, 表 20 に見られるように, 回答者の日本滞在期間が長いほど, 性差の学習意欲が認識, 使用の両項目で強くなっていることがわかる.

6. 考 察

学習者の視点から見た日本語の性差に関する今回の調査の結果から, 1 大学のみで行われたパイロット調査 (Iida and Thomson 1999) の結果と同様に, 回答者の学生の大半が性差の学習に意欲的であることがわかった.

回答者は, 学習に意欲的ではあるが, 日本語の性差とは何かについては理解にばらつきがあった. 回答者が日本語の性差の表れとして一般的によく認識していたのは, 人称代名詞, 呼称で, 半

数以上が認識していたのは待遇表現の使用、音声に表れる差異、非言語コミュニケーション形式であった。接頭辞や、漢字語彙の使用頻度などの項目は、あまり認識されていなかった。人称代名詞、呼称は、指導者調査でも多く挙げた項目だが、教師の認識度が比較的良かった待遇表現の使用、音声に表れる違い、非言語コミュニケーション形式を半数以上の学生回答者が認識しているのが興味深い。

また、学習レベルが上がると、漢字語彙使用頻度の項目以外は認識度が高くなる。指導者調査に現れた教師側の躊躇に反して、学習者が中上級に達するまでに何らかの学習が起こっているようである。認識度は日本語母語話者との接触頻度、日本滞在日数とも関連していて、また、学習レベルと日本滞在日数にも強い相関がある(スピアマンの順位相関係数 $r_s(695) = .4805$ ($P < .001$))。教師が指導に消極的であった点を考慮すると、学習が教室内における意識的な指導によるものというより、教室外における自然習得によるものである可能性が高いのではないかと考えられる。

漢字語彙使用頻度の項目は、学習レベル、日本語母語話者との接触頻度、日本滞在日数に関係なく、学生回答者には一般的に認識度が低く、漢字圏出身と思われる中国系、韓国系の文化背景の学習者が、他のグループに比べて認識度が高いという結果が出た。話し言葉は、日本滞在歴が長いと上達するケースが多いが、日本滞在歴は書き言葉や、漢字語彙にあまり影響がないという報告(Thomson 1996)もあり、漢字語彙の使用頻度に表れる性差に関しては、意識的な教室内での指導が必要になってくるところではないか。

指導者調査では、性差別と関連した否定的なイメージが、性差指導における懸念として回答されていた。しかし、今回の学習者調査では、性差の捉え方、性差の学習意欲の両項目で、全体的には回答者が性差に積極的な姿勢を見せている。日本語の性差を性差別と捉える回答者も3分の1程度あったが、それでも、半数近くの回答者が日本語の性差は日本の伝統であるとし、大半の回答者が性差を認識できるように、さらに、性差表現を使えるようになりたいと回答している。

さらに、性差を性差別と捉えているのは中国系、韓国系に多く、性差の学習に一番意欲的なのはオーストラリア系であるという結果が出た。男女平等の普及が進んでいるオーストラリアでこそ、日本語の性差に一番反発があるだろうという筆者の予想は覆された。この予想は、指導者調査の結果とも呼応するものである。また、男女間では、一般的に男性が女性より性差に肯定的、性差の学習に積極的であり、文化背景別男女間の差を見ると、特に、中国系、韓国系の女性回答者が男性より日本語の性差と性差別の関連に敏感であることがわかった。しかし、教師に懸念されたオーストラリア系グループに関しては、男性、女性回答者間で性差の認識、使用の学習意欲に関しては、統計的に有意な差がないことがわかった。

男女平等をはじめ、全ての国民の平等をモットーとするオーストラリアを母文化とする回答者よりも、自分の出身文化に性別による分業、また、性差別が存在すると思われる文化背景、つま

り、中国系、韓国系の回答者が性差別に敏感であると考えられる。しかも、自分が差別される側となる女性回答者が、性差別に敏感であることは当然だろう。また、調査票の質問の言葉遣い、例えば、「日本の美しい伝統」「尊重され、受け入れられるべき」などが、歴史的に日本と難しい関係にある中国系、韓国系の回答者には馴染まなかった可能性も考えられる。さらに、オーストラリア系回答者は、他のグループに比べて圧倒的に日本滞在期間が長いことから、そして、滞在期間と学習意欲は強い相関があることから、文化背景ということよりも、滞在の長さで、オーストラリア系の回答者の学習意欲が高くなっているとも考えられる³。

指導者調査の結果に現れた、そして、筆者も感じていた、教師側のオーストラリア系学習者に性差を指導することへの懸念は、少数のオーストラリア系学習者が稀に挙げる疑問に敏感になりすぎていた結果ではないかと思われる。声に出さない疑問や不満はアジア系の学習者の方に多くあったはずだ。自分の意見をはっきり言わない、言えないタイプの学習者の声に耳を傾けるには、やはり、特定の学生から聞く逸話や、教師の感覚だけに頼らず、データに基づいた判断が必要なことを再確認した。

オーストラリア系の女性も男性同様性差の学習に意欲的であるという点に関しては、日本滞在期間の長さでは説明がつかないように感じられる。オーストラリア系は男女ともに日本滞在期間が長い。男性の方が有意な差でさらに長いからだ。Reynolds (1998) が述べるように、言語に表れる性差は、普通男性言葉が規範とされ、無標で、女性言葉が規範から外れた有標であるとされる。男女平等をモットーとする社会から訪日したオーストラリア女性は、有標である女性言葉により敏感に反応し、その認識、使用の重要性に気付き、学習意欲を高めたと言えるのかもしれない。

しかし、文化背景については、学習者の自己申告に基づいているものの、例えば、何をもって中国系とするか、中国系ということが何を意味するのかは、オーストラリアの様な社会では大変複雑で難しくなっていることに注意が必要であろう。中国系と言っても、台湾からの留学生もいれば、オーストラリア生まれで、両親の出身地、中国には一度も行ったことがない学生もいる。文化背景で学生をくくることは将来的には意味がなくなっていくのかもしれない。今回の調査では2%に満たないが、自分を多文化背景と申告した学生の存在がその指針である。

7. おわりに

本稿では、オーストラリアの日本語学習者が見た日本語の性差についての調査を中心に、指導者調査の結果とも合わせて、学習者の性差についての意識の考察を試みた。指導者調査から、教

³ この点に関しては、ロビン・スペンス-ブラウン氏に指摘を受けた。

師間の性差理解, 取り扱い, などに多様性が示されたのと同様に, 学習者調査からも学生間に性差理解, 取り扱い, 学習意欲に多様性が見られた。さらに, 教師の理解と学生の理解にも差異が見られた。しかし, 全体的に見て, 学習者が性差の学習に意欲的であることから, 性差を何らかの形で指導する必要があると感ぜられる。特に漢字語彙に関わる性差については, 自然習得の難しさが見られることから, 教室活動での指導の必要性が示唆された。指導者調査からは, 指導の方法, 時期, 内容などにコンセンサスのないことがわかったことを考え合わせると, 性差をどのように効果的に指導していくかを考察していくのが今後の課題となるだろう。また, 指導にあたり, 日本語の性差を, 単に男はこう話す, 女はこう話すというように二項対立をさせ, イデオロギーとして捉えるのではなく, むしろ, 話者のアイデンティティーやディスコースが成り立つコンテキストから言語の性差を捉える社会言語学的アプローチが今後益々必要となってくるだろう(中村 2002, 湯川 1998)。そのためにも, 本研究の課題 3 にあたる接触場面の実際使用言語の調査分析が望まれるところである。

今回の調査は, オーストラリアの高等教育機関の学習者を対象としているが, 回答者は全体の約 7% に過ぎず, 無作為抽出ではないので, 結果の一般化は望めない。それを理解したうえで, 性差の指導, 学習という大変難しい課題への理解を少しでも進めるのに役立てることができたら幸いである。

謝 辞

本稿は, オーストラリアの 6 大学の学生を対象としたアンケート調査なしには成り立たなかった。アンケート調査に協力して下さった先生方, 参加してくれた学生諸氏に感謝したい。本稿の推敲には舛見蘇弘美氏の助言を受けた。お礼を申し上げる。

参 考 文 献

- 浅田浩文(1998) 「第二言語としての日本語の男言葉, 女言葉——男女差を示す文末表現における日本語学習者の産出, 受容能力」『日本語教育』96: 25-36.
- 阿部圭子(1998) 「最も性差のある言語——言語の性差の多重構造」『月刊言語』Vol. 28 No. 5: 72-76, 大修館書店.
- 井出祥子(1997) 「女性語の世界: 女性語研究の新展開を求めて」井出祥子編『女性語の世界』, 1-14, 明治書院.
- (1992) 「女性語のスタンス」『ことば』vol. 13: 2-9, 現代日本語研究会.
- 宇佐見まゆみ(1997) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコースポライトネス」現代日本語研究会編『女性の言葉 職場編』, 241-268, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ編(1997) 『言葉は社会を変えられる: 21 世紀の多文化共生社会に向けて』, 40-55, 明石書店.
- 内田伸子(1997) 「会話行動に見られる性差」井出祥子編『女性語の世界』, 74-93, 明治書院.
- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一(1984) 「性差別のエスノメソロジー——対面的コミュニケーション状

- 況における権力装置」『現代社会学』Vol. 10 No. 1: 143-176.
- 遠藤織江 (1990a) 「男と女の話し言葉——日本語教育と性差検証の視点から」『ことば』Vol. 11: 61-88, 現代日本語研究会.
- (1990b) 「女らしい日本語を教えるべきか——外国人の日本化を考える」『日本語』2月号, 12-13, アルク出版.
- 大原由美子 (1997) 「社会音声学の観点から見た日本人の声の高低」井出祥子編『女性語の世界』, 42-58, 明治書院.
- 金丸芙美 (1997) 「人称代名詞, 呼称」『女性語の世界』, 15-32, 明治書院.
- 川崎享子 (1997) 「教科書の中の男女差」『日本語』3月号, 64-67, アルク出版.
- 川成美香 (1993) 「依頼表現」『世界の女性語 日本の女性語』, 125-134, 明治書院.
- 国際交流基金 日本語国際センター (2000) 『海外の日本語教育の現状=日本語教育機関調査 1998年=』.
- 重光由加 (1993) 「会話のパターン」『世界の女性語 日本の女性語』, 135-140, 明治書院.
- トムソン木下千尋・舛見蘇弘美 (1999) 「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者——その問題点と教師の役割」『世界の日本語教育』Vol. 9: 15-28.
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』Vol. 7: 17-29.
- 中村桃子 (2002) 「言語とジェンダー研究」の理論」『言語』, 24-31, 大修館書店.
- マグローイン花岡直美 (1997) 「終助詞」井出祥子編『女性語の世界』, 33-41, 明治書院.
- 松田美佐・佐々木由美・笹川洋子・小田切由香子 (1995) 『言語的コミュニケーション方略に関する性差の異文化間比較研究, 東京女性財団助成研究報告書』, 東京女性財団.
- 森野宗明 (1975) 『王朝貴族社会の女性と言語』, 有精堂出版.
- 谷部弘子 (1992) 「日本語教育と女性」『ことば』Vol. 13: 32-43, 現代日本語研究会.
- 湯川純幸 (1998) 「ことばとジェンダーと権力の関わりに迫る——言語とジェンダー研究の到達点」『日本女性学会学会誌・女性学』6号: 135-160.
- Coates, J. 1986. *Women, men and language: a sociolinguistic account of sex differences in language*. New York: Longman.
- Coates, J. and D. Cameron, Eds. 1988. *Women in their speech Communities*. New York: Longman.
- Hirschman, L. 1994. "Female-male differences in conversational interaction." *Language in society* 23(3): 427-42.
- Holmes, J. 1995. *Women, Men and Politeness*. New York: Longman.
- . 1998. Women's Talk: The Question of Sociolinguistic Universals. *Language and Gender: A Reader*, J. Coates, 461-83. Oxford: Blackwell.
- Ide, S., M. Hori, et al. 1986. "Sex difference and politeness in Japanese." *International Journal of the Sociology of Language* 58: 25-36.
- Iida, S. and C. K. Thomson. 1999. "Should we teach Australian female learners of Japanese to speak and behave like Japanese women? — A study of gender related perceptions of teachers and learners of Japanese in Australia." 12th World Congress of Applied Linguistics, AILA'99 Tokyo, August 1-6, 1999.
- Lakoff, R. 1973. "Language and Woman's Place." *Language in Society* 2: 45-79.
- McGloin, H. N. 1991. "Sex Difference and Sentence-Final Particles." *Aspects of Japanese Women's Language*. S. Ide and H. N. McGloin, 23-41. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Mishina, S. 1994. "A new perspective on women's language in Japanese: An interview with Sachiko Ide." *Issues in Applied Linguistics* 5(2), 425-35.
- Otsuji, E. and C. K. Thomson. 2001. "Evaluation of Business Japanese textbooks: Issues of gender." Japanese Studies Association of Australia Conference, UNSW, Sydney, June 27-30,

- 2001.
- Reynolds, K. A. 1998. "Female Speakers of Japanese in Transition." *Language and Gender: A Reader*, Coates, J (ed.), 299–308. Blackwell.
- Tannen, D. 1990. *You just don't understand: Women and men in conversation*. New York: Ballantine.
- . 1993. "The Relativity of Linguistic Strategies: Rethinking Power and Solidarity in Gender and Dominance." *Gender and Conversational Interaction*. D. Tannen, 165–188. New York: Oxford.
- . 1994. *Gender and Discourse*. New York: Oxford.
- Thomson, C. K. 1996. "Employment and Language Ability of Australian Non-Native Speakers of Japanese: A Sydney Case Study." *Japanese Studies*, Vol. 16, No. 1: 15–34.
- Zimmerman, D. H. and C. West. 1975. "Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation." *Language and Sex: Difference and Dominance*. B. Thorne and N. Henley, 105–29. Rowley, MA: Newbury House.

参考資料

Questionnaire on Gender in the Japanese Language

I. About yourself:

Please circle one or fill in the bracket.

- You are [male / female].
- You are [____ years old].
- Please state the name of the Japanese course you are currently enrolled in.
[_____].
- How many years have you studied Japanese so far? [____ years].
- How long have you spent in Japan? [____ years ____ months ____ days].
- Do you currently have regular contact with Japanese people?
[everyday / weekly / sometimes / seldom / never].
- Your cultural background is [Australian / Chinese / Indonesian / Korean / Malaysian /
Other: please specify _____].
- Your first language is [English / Cantonese / Indonesian / Korean / Malaysian / Manda-
rin / Other: Please specify _____].

II. About the Japanese language:

Please tick all that apply.

You knew that in the Japanese language gender differences appear in the following:

- sentence final forms, e.g. のよ, だぜ
- personal pronouns e.g. ぼく, わたし
- address terms e.g. ~さん, ~くん
- vocabulary items e.g. めし, ごはん
- use of prefix (おはな, ごりっぱ) e.g. High use, Low use
- use of kanji words e.g. High use, Low use
- level of politeness e.g. High level, Low level
- tone and pitch level of voice e.g. High pitch, Low pitch
- participation style in conversation e.g. High involvement, Low involvement
- non-verbal communication style e.g. Covering mouth, Head movement

Others: please specify _____.

III. About your perception of the Japanese language:

Please circle one that best describes your perception.

- Gender differences appear in most languages. They don't necessarily denote inequality, but merely the differences between the sexes.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree
- Gender differences in Japanese represent and promote gender discrimination. They should be avoided.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree
- Gender differences are a part of Japanese tradition and culture. They should be respected and accepted.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree
- Gender differences in Japanese are a beautiful tradition of Japan. They accentuate the male and female characteristics and should be preserved.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree
- Gender differences in Japanese are in transition. They will eventually disappear.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree

IV. About you as a learner of Japanese:

Please circle one that best describes your belief.

- It is important to learn to recognise the gender differences.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree
- It is important to learn to use gender differences in communication.
strongly agree / agree / neutral / disagree / strongly disagree

V. If you have further comments, please state here: